

京都府立医科大学の「今と未来」を伝える広報誌

The KPUM TIMES

COMMUNICATION MAGAZINE

Renewed

vol. **04**

February 2026

世界をつなぐヒポクラテスの精神



療病院の提灯
療病院で実際に使用していた提灯であるが、赤十字のマークが抜かれている。赤十字のマークを病院の標識としたのは、わが国で最初のことであった。

特集1 | **4大学連携研究フォーラム**

特集2 | **創立150周年記念事業**

特集3 | **EXPO 2025 大阪・関西万博出展**



京都府公立大学法人
京都府立医科大学
KYOTO PREFECTURAL UNIVERSITY OF MEDICINE



療病院の提灯(本部棟1階歴史館蔵)

当提灯は、療病院で実際に使用されていたものです。赤十字のマークが施されていますが、赤十字マークを病院の標旗として用いたのは、日本で初めての試みであったとされています。本学の歴史を伝える貴重な資料です。

CONTENTS

03 学長挨拶

05 特集1 4大学連携研究フォーラム

06 特集2 創立150周年記念事業

08 特集3 EXPO 2025 大阪・関西万博出展

10 Topic 1 研究紹介

11 Topic 2 産学公連携

Topic 3 看護

12 Topic 4 地域

公開講座

京都モダン建築祭

13 Topic 5 国際

News 1 白衣授与式

14 News 2 学生の活動

アカウントアメーバに関する研究紹介

トリアス祭

15 新任教授紹介

生命基礎数理学 吉井 健吾 教授

消化器内科学 高木 智久 教授

16 大学、附属病院からのお知らせ

学長挨拶

学長1期目3年間を振り返って

— 教育・研究・医療を

未来につなぐ基盤づくり —

京都府立医科大学 学長 夜久 均

3年前に学長としてのビジョンを示しました。大学の理念である「世界トップレベルの医学を地域へ」を具現化するための2つの大学像を追求することです。その2つの像とは1)医学の分野で世界に伍する研究大学、2)すべてのステークホルダーの期待に応える地域の拠点大学です。1期目3年間は、このビジョンを具現化するため、本学がこれからの時代に果たすべき役割を改めて見詰め直し、その基盤を整える期間であったと感じています。急速な社会変化、人口構造の変容、医療ニーズの高度化・複雑化といった課題の中で、大学として何を守り、何を変えていくべきかを常に問い続けてきました。



教育面では、「学修者本位の医学教育」を軸に、カリキュラムの体系化と質保証の強化に取り組みました。令和4年に改訂された医学教育モデル・コア・カリキュラムへの対応を進めるとともに、大学機関別認証評価および医学教育分野別評価への受審準備を機会に、教育内容と運営体制を点検・改善してきました。そして無事承認を得ました。また、入試制度についても、学力のみならず主体性や協働性を重視する選抜の導入に向けた検討を進め、多様な資質を持つ学生を迎える環境づくりを目指し、令和8年度入試から学校推薦型選抜の全国一般枠を開始します。

研究面では、本学が有する研究成果を社会実装・社会還元し、次世代につなぐ仕組みづくりを重視してきました。その目的で、研究の産学公連携を推進する基盤としてKPUM Medical Innovation Core for Society (K-MICS)を設立し、企業や自治体との協働による研究・社会実装を後押ししています。また、地域医療の現場と研究を結びつける大学院教育の展開(北部キャンパス大学院地域医学コースの設立)や、学際的研究拠点の運営を通じて、本学ならではの研究のあり方を模索してきました。

附属病院においては、高度急性期医療と地域医療の両立を図る体制整備を進めていますが、2024年4月には京都府より救命救急センターの指定を受け救急搬送が急増し、また同時期に始まりました医師の働き方改革の中で、診療の効率化を進め、臨床研究力、医療の質を維持するべく教育・研究・医療が一体となった大学病院の機能強化に附属病院長とともに取り組みました。

この3年間、多くの教職員、学生、関係機関の皆様の支えによって歩んでくることができました。2期目に向けては、これまでに整えてきた基盤を具体的な成果へと結びつけ、本学が「世界に伍する研究力で、地域に貢献する医科大学」としてさらなる発展を遂げられるよう、引き続き全力で取り組んでまいります。

夜久学長に聞いてみた!

3年間の軌跡、学長の本音 —— 今だから話せる想いを、一問一答に凝縮しました

この3年間で感じられた、学生たちの「姿勢」の変化はありますか?

学生が持っている価値観が非常に多様化していると感じることが多いです。例えば休学して起業したり、将来医師と弁護士の二刀流を目指したり等です。一方では校旗を掲げて西日本医科大学体育大会で戦う学生等からも昔からのメンタリティーを引き継いでくれている学生がいることも実感しています。

任期中、学外(地域住民や他大学)からの評価で一番嬉しかった言葉は何ですか?

学長になってから年度末にマスコミを集めて一年の総括をしているのですが、昨年度ある記者に言われた「大学が変わってきましたね」という言葉です。

この3年間で最も困難だった決断と、それを支えた学長自身の信念は何でしたか?

学長は時に大きな決断を迫られます。一つは大学病院として救命救急センター指定を受けるか、もう一つは大学整備構想を進める中での決断でした。信念としては、学長独りよがりになってはいけない、大学執行部の総意で決めること、そして何よりも大学の将来にとって、また未来の大学を担う世代にとって本当に何をなすべきかを考えることにつきます。

この3年間を表す「漢字一文字」とその理由を教えてください。

改めて確信された「本学にしかない強み」とは何ですか?

単科大学という規模の小さい大学であり、すべての領域全てをカバーできないながら、特定分野で世界に負けない研究や臨床が展開されています。また全教職員が地域課題を解決するという使命感を持っていることかと思います。

伝統ある京都という地において、この3年間で地域社会や他機関との連携はどう深まったと実感されていますか?

K-MICS、京都クオリアフォーラム等を通じて、京都企業、京都老舗からの本学への信頼は非常に厚い事が実感できました。また企業との共同事業等はかなり密に連携することができるようになりました。

学長として大学を舵取りされる中で、最も「良い意味で予想外だった」出来事や変化は何ですか?

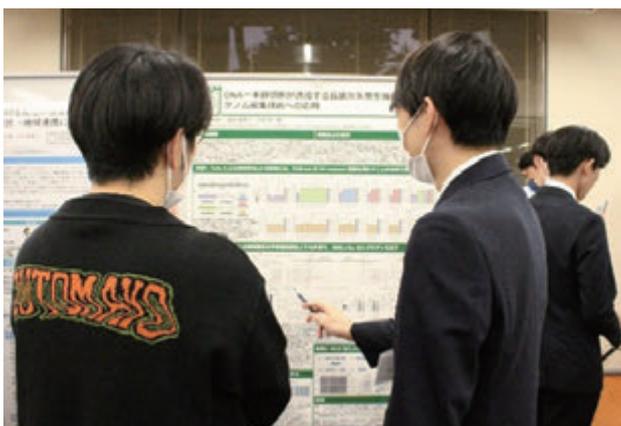
大学教職員、学生すべてにとって、目に見えて変わったのは図書館にラーニングcommons(Koto Square)という自由な異文化交流の空間ができたことかなと思います。これは広小路キャンパス活性化プロジェクトの一環の事業ですが、ここまで進むとは思いませんでした。図書館長、そしてそれを支えた図書館事務長の熱意と実行力に感謝です。

私が今一番思っているのは、学長1人のアイデアやパワーでは大学という組織は動きません。大学、学長を支えていただいている大学教員、大学職員、学生が持ち寄ってくれる企画によって大学が成長できたと思っています。従いまして「支」という一字を挙げたいと思います。



第15回 4大学連携研究フォーラムを 開催しました

令和7年11月26日(水)、本学、京都府立大学、
京都工芸繊維大学及び京都薬科大学は、
第15回4大学連携研究フォーラムを開催しました。



このフォーラムは、4大学の教員や研究者、学生等が一堂に会し、お互いの研究内容に関する情報交換等を実施することにより、共同研究等の学術交流を促進し、4大学の研究活動の活性化や研究基盤の強化に資することを目的に毎年開催しています。

第15回目となる2025年は、本学が幹事校として、広小路キャンパス図書館ホールと、4月に開設したラーニングコモンズ「Koto Square」(コトスクエア)にて開催しました。

当日は「ヘルスサイエンスの総合化」をテーマとして開催し、夜久 均学長による開会挨拶の後、東北大学大学院医学系研究科教授 大隅 典子先生による基調講演「研究力向上のために欠かせない組織ブランディングとセルフプロデュース」が行われ、参加者のみなさんは熱心に耳を傾けていました。

続いて、4大学連携による共同研究成果発表を行い、本学からは妹尾 恵太郎 准教授が「心房細動患者に対する非監督下での運動サポートプログラムの開発」について発表されました。

その後のポスターセッションでは、多くの4大学の教員・学生が出展したポスターを前に発表を行い、活発に意見を交換しました。

最後に行われた交流会では、様々な分野の学生や教員が、お互いの研究の話題で盛り上がり、意見交換しながら交友を深めました。

また、交流会では学生部門における優れたポスター発表への表彰式が行われました。

本フォーラムには約200名が参加し、大盛況となりました。



京都府立医科大学創立150周年記念映画『幕末ヒポクラテスたち』完成報告

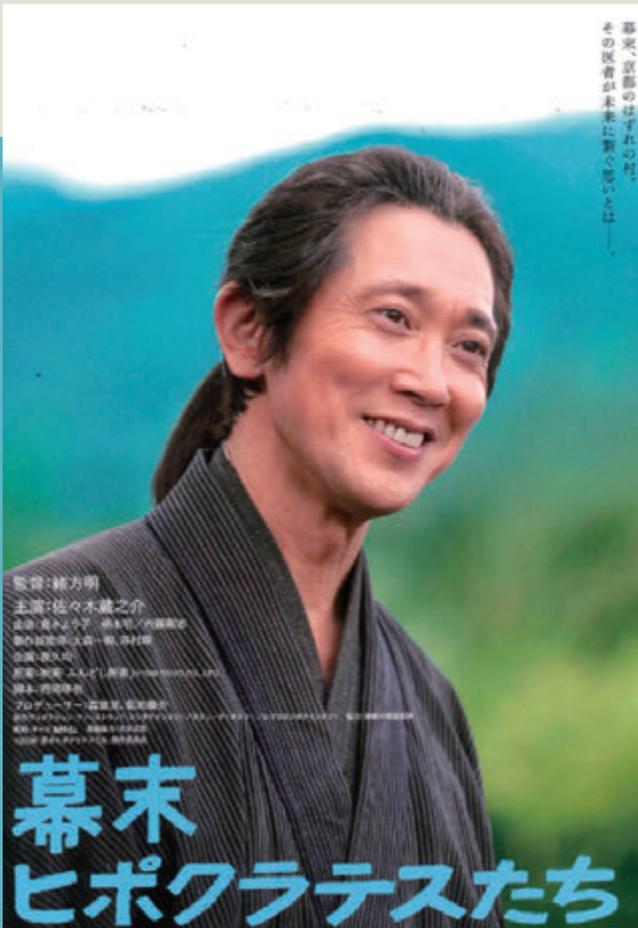


京都府立医科大学創立150周年記念事業に関する多数の事業候補公募の中、記念事業委員の皆さまによる選挙で第1位にご推挙いただきました本

企画は、現代の「コロナ感染症パンデミック」と鏡合わせのような幕末の「パンデミック感染症」を乗り越えた京都府立病院黎明期の医師「元祖ヒポクラテス」たちの志・人間愛の源流を大学創立150年の記念に描きたいと願って企画しました。

粟田口青蓮院に、当時、花街を支える旦那衆や仏教界などの多職種の京都人の支援と期待に基づいて建立された本学附属病院の前身である「京都療病院」の誕生につながる物語であり、企画から約5年かかりましたが、この度、完成し、トリアス祭の後際として文化の日に、図書館ホールにて、先行上映会を催すことができました。

多数の皆様からご支援を賜り、無事完成の運びとなりましたこと、心より感謝申し上げます。謹んでご報告させていただきます。上映会では、京都府西脇知事もお越しいただきご祝辞を賜りました。



特集2 | 創立150周年記念事業



創立150周年記念映画製作委員会委員長
150周年記念映画・製作総指揮 浮村 理



この映画製作は、本学出身の医師かつ映画監督、大森一樹先生の1980年発表のヒット作で、本学学生寮の橋井寮や鴨川沿いの喫茶店などを舞台

に、京都鴨川でも撮影、医大生の青春と葛藤を描き出した青春群像劇映画(第1作)「ヒポクラテスたち」の第2作として大森先生に依頼したものです。

大森先生は「長い映画人生の集大成」として取り組む熱意で、先ず脚本は大森先生を1970年代から知る西岡琢也氏に担当していただきました。その後、残念なことに、キャストの選択半ばにして不治の病で大森先生がお亡くなりになってしまい、本映画

製作がとん挫する大きな危機もありました。

しかし、関係者の皆様からの映画完成を望む力強い声にささえられまして、大森先生の助監督もお勤めになられたご経験があり、ベルリン映画祭などでも受賞経験のある緒方明映画監督を迎えて、映画製作の継続がきました。何より、「元祖本学ヒポクラテス」という主役を、京都出身の俳優、佐々木蔵之介さんに受けていただけたという幸運に恵まれ、さらに、ヒポクラテスたちの第1作にも出演の柄本明さん・内藤剛志さん、蔵之介さんの妻役に真木よう子さんという有名俳優陣にも恵まれまして、東映撮影所や京都丹後地域に幕末の撮影舞台・薬草園などを設営して撮影は順調に進みました。

佐々木蔵之介ら豪華撮影チームで府立医大の志・人間愛の源流描く幕末医療映画



Movie Overview 映画概要

幕末の京の外れの或る街、佐々木蔵之介さんが演じる蘭方医・太吉が、貧しい者からは診察代をとらず、貧富や立場の区別なく市井の人々を救おうと奮闘し、医術を担う次世代への思いを継承しようとする志あるものも登場して生き生きと映像が流れていきます。

太吉のライバルを自称する、“どんな病も葛根湯”の漢方医・玄斎を演じるのが、ヒポクラテス第1作でデビューを果たした内藤剛志さん。気性は荒いが、心が優しく、大けがを負ったところを太吉に助けられた青年・新左を藤原季節さんが演じ、太吉と新左をめぐる大展開には是非ご期待いただきたく思います。新左の美し

い妹・峰に藤野涼子さん。太吉をやさしく、時には強く支える妻・フミを真木よう子さん。そして謎の侍・弾蔵をヒポクラテス第1作で年長者の研修医役を演じた柄本明さんが担当。ナレーションを、大森監督作「風の歌を聴け」(1981)で映画デビューを果たした室井滋さんが務める。

京都と大森監督にゆかりのあるキャスト・スタッフが集結して製作にご尽力いただきました。



史実をテーマに、本学元祖の医師たちの志を、今の京都府立医科大学に受け継ぐ象徴となる映画です。



Filming team 撮影チーム

東映京都撮影所(太秦)での映像撮影は、いわゆる映画につきもののカチンコにより、撮影の始まりと最後を合図しながら、およそ15秒カットが総数600カット超えにも及びました。

医療監修には、本学関連の現役世代にもご支援を賜り、私自身も有休をとったり、診療後に伺ったりと、何度も東映京都撮影所を訪れることになりました。

カットの中には本編に採用にいたらなかったカットも多数ありますが、それはベテラン監督の裁量です。東映京都撮影所での撮影最終日は約1年以上前になりますが、監督・プロデューサー・花

束を贈られた俳優陣・大道具小道具さん・カメラさん・メイクさんたちと撮影した「幕末ヒポクラテスたち映画撮影チーム」は、濃密で幸福な創作に没頭する時間を共にして、ついにやり終えたという安堵の中、最高の笑顔で心が一つになって、本映画のエネルギーがあふれるものとなりました。映像撮影の後には、編集、ナレーション、バックミュージック構成、に加え、俳優陣、撮影チーム、寄付・支援者、最後に監督の名前を全てエンディングロールに載せるなどの映画製作の多様なプロセスを経て、完成までさらに数か月を要しました。

全国ロードショーは
2026年5月からを予定しています

特集3 | EXPO 2025 大阪・関西万博出展

大腸がん検診啓発のための 大阪・関西万博を介した チリとの国際交流



本学では、「世界トップレベルの医学を地域へ」を理念に掲げ、地域の皆さまへ質の高い医療を提供しており、教育面においては優れた人材育成を目指し、国際化を重要なテーマの一つとして取り組んでいます。その一環として、2024年3月には本学とチリ共和国サンティアゴに所在するロスアンデス大学との間で、学生および医師の国際交流を目的とした協定が締結されました。チリでは過去10年間で大腸癌の死亡率が1.6倍に増加しており、全国民を対象としたがん検診制度が存在しないことから、社会的にも大きな課題となっています。こうした背景を踏まえ、両大学間の協定を基盤に、本学消化器内科学では、伊藤義人前教授に牽引いただき、夜久均学長、国際学術交流センター、および大学関係者のご支援のもとで、さらに京都府とも連携し、在日チリ共和国大使館、在チリ日本大使館、チリ保健省の協力を得て、2024年度および2025年度の内閣官房「万博国際交流プログラム」に応募し、採択を受けました。

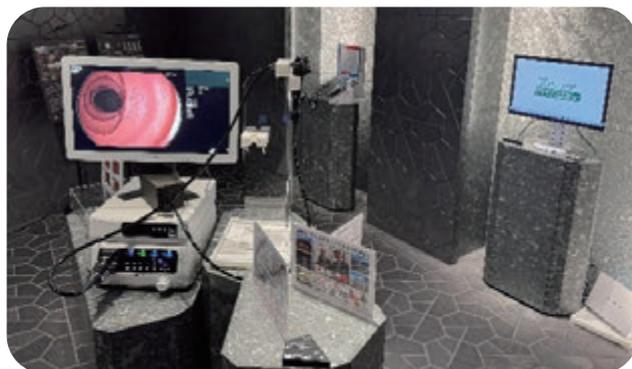
大阪・関西万博は「いのち輝く未来社会のデザイン」をテーマとしており、国際交流に加えて医療分野にも重点が置かれています。本事業において本学消化器内科学では京都府と協働し、以下の4つを主な柱として2年間にわたり活動を実施しました。

1. チリの医療・文化および両大学が取り組む国際交流の紹介
2. 日本とチリ双方で重要な課題である大腸癌の現状と検診啓発
3. 消化器癌に対する内視鏡診療の進歩の紹介
4. チリにおける内視鏡診療に従事する医師・スタッフの人材育成支援

2025年の中心的活動として、以下の2つの主要イベントを開催しました。

1. 2025年7月7日：本学図書館「Koto Square」での府民公開講座
2. 2025年9月7日～15日：大阪・関西万博期間中、関西パビリオンでの展示

両イベントの開催にあたり、ロスアンデス大学からは Francisco Espinoza 病院長、Francisco Lopez がんセンター長をはじめ計5名の医師を招聘し、学術的・人的交流をさらに深めることができました。特に2025年9月の万博出展では、本学附属病院の内視鏡・超音波診療部の医師、看護師、臨床工学技士、企画課、さらに機器提供をいただいた富士フィルム社を加え、総勢20名を超えるメンバーで関西パビリオンにて展示を行いました。AI を搭載した最新の内視鏡機器を展示し、日本と



関西パビリオン京都ブース内の本学の展示

最新のAI搭載LED内視鏡を展示し、来場者に体験いただき、また日本と世界の大腸癌の現状、最新の内視鏡治療、および国際交流についてのパネルを設置し、来場者の大腸癌や内視鏡診療への関心の向上を図りました。



ロスアンデス大学の先生方と



最新の内視鏡機器についての説明・実演

お子さまも興味津々で聞いてくださいました。

チリにおける大腸癌の現状と大腸がん検診の啓発、本学とチリとの医療分野における国際交流、さらには未来につながる医療技術の紹介をテーマに、国内外からの来場者約12,000人に発信しました。

最後に、今回の万博での取り組みを通じて全国的に大腸癌への関心が高まり、大腸がん検診のさらなる普及につながることを期待しております。また、今後も本学消化器内科学では高木新教授を中心に、本邦の大腸癌の減少に寄与できますよう、大腸がん検診の啓発、大腸内視鏡診療の進歩に貢献していきたいと思っております。そして夜久学長にご支援いただきながらチリのロスアンデス大学との国際交流のさらなる発展、さらに将来的なチリでの大腸がん検診の実施に向けて尽力していきたいと思っております。

大学院医学研究科 消化器内科学
講師 吉田 直久

伝統と未来が交差する 「Co-Creation with AI」



大阪・関西万博2025に出展する。そう狙いを定めたのは、コロナ禍の真っ只中、京都府の「コロナ社会対応ビジネスモデル創造事業補助金」に採択され、ウェアラブルデバイス開発が第2段階を迎えた2022年春のことだった。幾度もものコンペを勝ち残り、たどり着いた万博という舞台。そこで直面したのは、まさに国境や時間を越えた「Co-Creation(共創)」の祭典そのものであった。

会場には、世界中から「知」が集結していた。アメリカパビリオンが掲げる共創の精神。フランス館の「ロダンの手」が放つ手作りの温もり。そしてイタリア館で目にしたレオナルド・ダ・ヴィンチの設計図の実物。「この文字を、あのダ・ヴィンチが記したのか」——。実物が放つ圧倒的な「実在の力」は、数世紀を経て色褪せることなく、私たちに文化と人間の底力を問いかけてくる。

大阪府・市主体の「大阪ヘルスケアパビリオン」もまた、未来への問いかけに満ちていた。「人間洗濯機」や「iPS心筋シート」といった先端技術展示の奥には、人々が自身の「未来」を体験する「REBORN」ゾーンがあった。その中央こそが、私たちの出展の舞台であった。

ゴールデンウィークの会場は、まさに立錫の余地もないほどの喧騒だった。朝9時から夜9時まで、実に合計1752組もの来場者と向き合った。喉を枯らしながらの説明を支えてくれたのは、精鋭の仲間たちの存在だ。激務を終えた後の関係者食堂での食事、乾いた体に染み渡る水、そして首から下げた「関係者IDパス」でゲートを通る瞬間の誇り。それは、医療も万博も、結局は「人」の熱意で動いていることを再確認する時間でもあった。

忘れられない光景がある。コロナ禍で夫を看取られたという老婦人が、内科医の息子さんに車椅子を押されて来場された時のことだ。彼女が抱える喪失感や、展示を見て溢れ出た想い。私はただ、その想いを受け止めることしかできなかった。しかし、その瞬間にこそ「ヒポクラテスの精神」——技術がいかに進歩しようとも、最後に人の心を癒やすのは人の手である——という真理が宿っていたように思う。

「がんばって、実現してください」

その言葉は、今も私の胸に深く刻まれている。

もし、医学の父ヒポクラテスが大阪・関西万博を訪れたら、何を思っただろうか。

2025年、世界はAI(人工知能)と共存する新たなフェーズに入った。次世代HBM(広帯域メモリ)の生産や、GPT-OSSをはじめとする大規模言語モデル(LLM)、RAG技術の進化は、かつて存在した「言語」や「国境」という壁を軽々と取り払い、知の定義を変革し始めている。日本語か、英語か。そんなボーダーはも



共創の舞台、大阪・関西万博2025



未来と向き合う「REBORN」ゾーン

大阪ヘルスケアパビリオン。連日、立錫の余地もないほどの賑わいを見せたブースで、未来の技術を体験する子供たちの瞳が輝いていました。



出展を支えた「共創」のチーム

幾多の困難を乗り越え、プロジェクトを成功に導いた精鋭のメンバーと共に。京都府の鈴木一弥副知事も来訪・体験されました。

はや過去のものとなりつつある。

万博を通じて確信したのは、テクノロジーが障壁を取り払った先に、美しい景色が広がっているということだ。最新の技術とAIもたらす「クロスボーダーな共創」。それは、多様な文化と価値観が混ざり合い、新しい医療の形を生み出す土壌となるだろう。

私たちは今、この境界のない世界で、まだ見ぬ医療の地平を切り拓こうとしている。

Co-Creation with AI。人類の進化は加速する。そんな確かな未来を体感できた万博であった。ああ、たのしかった！

大学院保健看護学研究科 臨床健康科学
教授 島田 順一

臨床研究

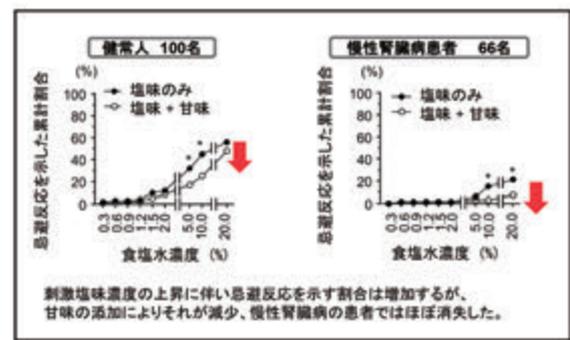
甘じょっぱい食物が塩味の濃さをぼやかすことで
塩分摂取を過剰にする可能性がある

血圧を適切にコントロールするためには塩分摂取を減らすことが重要です。この減塩への取り組みは、『ヒトは食塩を好む』という観点から行われていますが、海水を好んで飲まないように、ヒトはある濃度以上の食塩水を嫌います。我々は2024年、腎不全患者ではこの高濃度塩味に対する忌避行動が減弱していることを発表しました(Kidney Int Rep. 2024 Feb 16;9(5):1254-1264)。本研究では、味覚の相互作用(異なる味覚の同時刺激により味の強度が変わること)に着目し、高濃度塩味と甘味の同時刺激が塩味の忌避反応に及ぼす影響を検討しました。(Sci Rep. 2025 Jul 7;15(1):24322.)

健康人では塩味刺激の濃度を上昇させると忌避反応が観察され、甘味の同時刺激によりその反応は減弱しました(図左)。慢性腎不全の患者では元々高濃度の塩味に対する忌避反応は減弱していましたが、甘味の同時刺激によりその反応はほぼ完全に消失しました(図右)。このことは、甘味と塩味を含む『甘じょっぱい』食事では、塩味が高濃度でも忌避反応を示し

にくく、無意識に塩分摂取過剰を助長してしまう可能性を示唆します。食事の甘味を控えることは、高濃度の塩味の味が強調された結果として忌避を誘発し、減塩行動に繋がるのではないかと期待されます。

なお本研究は本学腎臓内科学(奥野奈津子研究員、草場哲郎学内講師)とハウス食品との共同研究で実施されました。



臨床研究

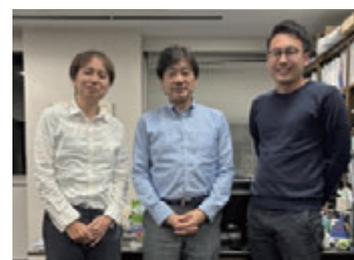
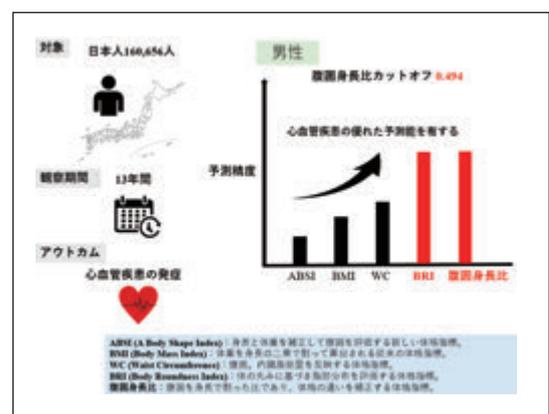
「腹囲が身長を超えると危険」、BMIより優れた新指標

「肥満」の判定に広く使われる指標にBMI(Body Mass Index)があります。しかし、将来の心筋梗塞や脳卒中といった心血管疾患の発症リスクを予測する上で、BMIが日本人にとって真に最適な指標なのか、これまで明確ではありませんでした。

そこで我々は、日本人を対象に大規模な観察研究を実施し、BMI、腹囲、腹囲身長比(腹囲÷身長)など、5種類の異なる体格指標の心血管疾患の発症予測精度を比較しました。その結果、従来のBMIよりも、内臓脂肪をより反映する「腹囲身長比」の方が、将来の心血管疾患の発症リスクをより正確に予測できることが明らかになりました。また、日本人男性では、「腹囲身長比」の値が凡そ「0.5」(=腹囲が身長を半分)を超えると、リスクが上昇することも示されました。

本研究は、日本人において、腹囲身長比の把握が心血管疾患の発症予防に極めて重要であることを科学的に示したものであり、本研究成果は臨床栄養学の分野で世界的に高く評価されている学術誌「The American Journal of Clinical Nutrition」に掲載されました。

今後、本研究の成果が、「腹囲は身長を半分まで」という新しい「ものさし」として、皆様の未来の健康を守る一助となることを願っています。



写真左から岡田助教、福井教授、市川大学院生

Topic 2

産学公連携

産学公連携で未来を拓く：K-MICS覚生塾の挑戦

本学らしさを活かし、チームで挑んだプログラムの展開Phase1

2025年度は「研究推進に必要なことを『知る・考える・実践する』」をテーマに掲げ、知財戦略・公的研究費獲得・医薬品開発と毎回テーマを変えながら、計3回開催しました。各回、講義とディスカッションを組み合わせた形式で実施しましたが、回を重ねるごとに参加者との一体感を感じることができました。第三回の『『五感』から診た健康を科学で考える』をテーマに掲げたプログラムは、K-MICSが果たすべき役割の一つでもある研究基盤強化に必要な「多様性確保」にも微力ながら貢献できたのではないかと思います。同じテーマで、研究・臨床分野を横断した研究者同士のディスカッションは、参加者一人ひとりに新たな気づきと未来への期待をもたらしました。参加者のアンケートでは「わくわくした」というコメントがあり、これぞイノベーションの源流なのではないかと感じました。

開催場所の大切さを実感

2025年度は開催場所を会議室からKoto Squareに移したこともチャレンジであり、交流の場としてのみならず、LIVE配信

も試みることができ、より多様な参加者ニーズを知るきっかけともなりました。ここに改めてご協力頂いた関係各位に感謝の意を表します。2026年度はさらにプログラムの質の向上を図り、チーム力を強化し、実践に挑みたいと思います。



Topic 3

看護

大学コンソーシアム京都単位互換提供科目・三大学共同化科目・ 高大連携「やさしい看護学」開催報告

8月7・8日の2日間、本学で「やさしい看護学」の集中講義が開催され、京都府立大学、京都工芸繊維大学の他に大学コンソーシアム京都から5大学、高大連携の京都府下の高校から13校のあわせて50名が参加しました。本科目は、看護学科の各領域が持ち回りで専門性を生かした授業を行うもので、2025年度は基礎看護学領域が「災害時に役立つ看護の知識と技術」をテーマに担当しました。

1日目は「看護の世界：いのちと向き合う仕事の魅力」から始まり、看護職の役割、共同意思決定、2040年問題など、看護を取り巻く最新トピックを紹介しました。続いて「災害時の医療と看護—市民の命と生活を守るために」の講義を行い、午後の演習「市民による災害時医療支援行動の基本」へとつなげました。演習では、「家族が災害で怪我をしたらどう行動するか」を題材に、応急処置を体験的に学びました。

2日目は「災害と感染管理」について学び、午後は「日常でも、災害時でも役立つ感染予防行動ABC」をテーマに実践的な演

習を行いました。受講生からは「新しい分野の知識が得られた」「災害医療や感染対策への関心が高まった」「今後役立つ技術が身についた」などの声が寄せられ、充実した2日間となりました。



生涯教育委員会 公開講座「救命救急医療 ―命を救う現場から―」を開催

本学では、府民に開かれた大学として、医学研究の成果を公開する場として毎年公開講座を開催し、生涯学習の機会を提供するとともに府民福祉の向上に努めています。

2025年度は「救命救急医療―命を救う現場から―」をテーマに、11月30日(日)、図書館ホールにて開催しました。救急医療科、循環器内科、脳神経外科、看護といった多角的な視点から救命救急医療の現状や救急搬送が必要となる症状について解説し、5名の教員・看護師によるリレー形式で実施しました。

高校生を含む幅広い年代の約190名が参加し、質疑応答でも活発な意見交換が行われました。受講者アンケートでは「満足」「やや満足」が約99%を占め、「一般市民でも救命に携われるアプリを知り活用したい」「将来救急看護師を目指しており、学びたい気持ちが一層強くなった」といった声が寄せられました。

本講座の様子はアーカイブ配信も行っておりますので、ぜひHPで「公開講座」と検索ください♪今後も地域とともに学び合う場の提供を継続してまいります。

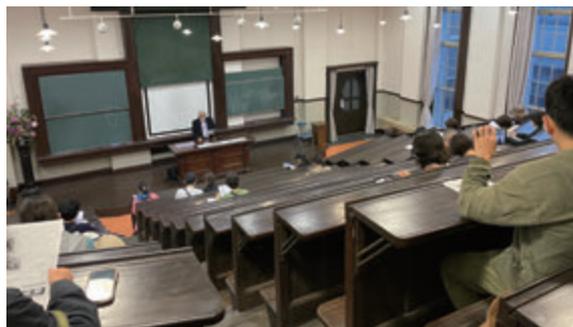


京都モダン建築祭2025にて本部棟を公開

京都に現存する魅力的なモダン建築を一斉公開する「京都モダン建築祭」が、2025年11月に開催されました。(主催：京都モダン建築祭実行委員会、共催：京都市)

本学は2023年度から3年連続で参画しており、2025年度は11月9日(日)に、本部棟1階の歴史館と3階の階段教室(西側・東側)を公開しました。本部棟(旧附属図書館)は1929年建設の本学を代表するモダン建築で、ネオ・ゴシック様式の外観やF.L.ライト風スクラッチタイル、アール・デコ意匠のステンドグラスなどが特徴です。

当日は雨天にもかかわらず、本学では過去最多の943名が来場し、床のタイルや照明、ステンドグラスを撮影したり、展示や建物の構造を見学したり、階段教室でガイドの説明を聞いたりと、さまざまな形で楽しんでいただきました。今回の公開は、本学をより身近に感じてもらう貴重な機会となりました。



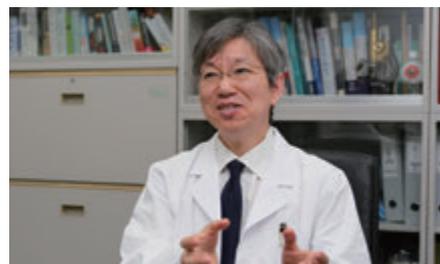
国際学術交流センター(IAEC)の取り組み

海外挑戦への背中を押す仕掛けづくりを

国際学術交流センターでは世界各国の大学と交流協定を結び、学生の留学や臨床実習などの受け入れと送り出しをさまざまな側面からサポートしています。毎年送り出している海外での臨床実習については2025年度、定員24名に対して30名以上の学生が応募。初めて定員を超えました。これまでにまいてきたタネが芽吹き始めているようです。

IELTS対策セミナーやイングリッシュカフェなど、海外で学ぶためのスキルを身につける機会を提供するのも私たちの役割です。2025年度は、主に大学院生へ向けた「英語で聞く」企画も実施。本学を訪問されたジョーンズ・ホプキンス大学、ヴァンダービルト大学それぞれの教授による講演会を3回開催しました。学部生にも声を掛けていたところ、3年生の学生がジョーンズ・ホプキンス大学の教授に直接交渉し、今春のラボ訪問を実現。積極的な行動が見られたことに手応えを実感しています。

世界中がウェブでつながっているとはいえ、日本にはわからないことも多い。異国の地で、同じ志をもつ学生と交流し経験することは大きな刺激になるはず。何よりも、グローバルな学問は英語で動いています。10年先の本学と卒業生の国際性を見据え、派遣学生の割合を増やすことは大きな課題です。そして私たち国際学術交流センターは、手を挙げた学生全員が海外へ挑戦できるよう背中を押してあげたい。そのために、協定校を増やすほか、人的交流がより盛んになるような仕掛けをつくっていききたいと思います。



国際学術交流センター 副センター長
大学院医学研究科 生体機能形態科学 教授 八代 健太

令和7年度白衣授与式

2025年11月25日に白衣授与式を実施しました。白衣授与式は、共用試験(OSCE, CBT)に合格し、臨床実習に臨むことを許された医学科4年生の学生に、医学科同窓会組織である学友会より寄贈された医師の象徴である白衣を授ける重要な節目の行事です。

当日は、夜久学長、河田学友会長をはじめとする多くの先生方にご出席いただき、学生一人ひとりに白衣を着せていただきました。

学生代表の謝辞では、「私たちに学びの場を与えてくださる患者さんに深く敬意を表すとともに、ご指導いただく先生方や

医療スタッフの皆様への感謝の念を忘れることなく、student doctorとして、臨床の現場で自分には何ができるのか模索しながら、一つひとつの経験から真摯に学んでまいります。」と決意の言葉が述べられ、出席した学生全員がその決意を共有しました。

白衣を授与された学生は、12月1日から始まった本学附属病院内での臨床実習に参加しており、医療人として必要な手技や知識、そして自覚を身に付けてまいりますので、皆様のご支援をお願いします。



感染病態学教室研究配属「アcantアメーバに関する研究」の紹介

私たちは、アcantアメーバ(淡水や土壌に生育している一般的なアメーバの一種)の動態に興味を持ち、このテーマで研究に取り組むことにしました。本学では近年、原虫であるアcantアメーバを扱った研究が行われておらず、まずは実験で使用する株を安定して培養するところからのスタートでした。過去の文献を参考にしながら、培地の組成や培養温度、二酸化炭素濃度などを調整し、試行錯誤を重ねることで、実験に適した状態で培養できる条件を特定できました。研究配属期間中には、まずアcantアメーバの正確な定量法(生きているアメーバの数を正確に測定する方法)を構築したうえで、アcantアメーバが死滅する温度条件や有効な消毒薬の濃度について調査しました。その結果、市販の消毒薬ではアcantアメーバに対する予防効果が十分ではない可能性を示すことができました。

テーマ立ち上げから実験条件の設定、検証までを一通り経験したことで、研究を効率よく進めるための考え方を身につけるとともに、研究の面白さや奥深さを実感しました。

研究配属終了後も私たちは指導教官である廣瀬亮平先生のご指導のもと研究を継続し、成果の論文化を目指し

ました。基礎配属で得られた結果をもとに検証実験を行い、データを集めて論文としてまとめ上げ、無事国際誌(Microbiol Spectr. 2025;13(10):e0117025.)に掲載されました。作業量の多い検証実験は大変でしたが、論文が受理されたときには、自分たちの研究が認められ、社会に少しでも貢献できたのだと実感し、大きな達成感を得ました。今後は、今回得られた知見を活かし、アcantアメーバに対して極めて効果の高い消毒条件の確立を目指して研究を続けていきたいと考えています。



実験風景(手前から松原さん、長谷川さん、廣瀬先生)

2025 TRIAS FESTIVAL

2025年トリアス祭

トリアス祭実行委員会 実行委員長
医学部医学科 4回生 今田 倫太郎

2025年のトリアス祭は、11月1日・2日の2日間にわたり開催されました。多くの方々にご来場いただき、非常に充実した学園祭となりました。関係者の皆様、ならびにご来場いただいた皆様に、この場をお借りして心より御礼申し上げます。

2025年は、主に三つの新企画を実施しました。

一つ目は「看護のとびら展」です。本企画は看護学科の実行委員が中心となり、看護学の基礎から実践的内容まで学べる充実した内容となりました。

二つ目は「臨床留学ライブ」です。本学出身で米国で心臓血管外科医として活躍されている豊田名菜先生をお招きし、米国の外科系レジデンシー制度や女性外科医のワークライフバランスについてご講演いただきました。多くの質問が寄せられ、大変有意義な企画となりました。

三つ目は、本学アイバンクへの寄付企画「アイバン!目の番人たち」です。医学科・看護学科が合同で制作したキーホルダーをガチャガチャ形式で販売し、その売上金を本学アイバンクへ寄付いたしました。本企画が、京都府の皆様へアイバンクへの理解をより深めていただく一助となれば幸

いです。

今後もトリアス祭では、学生や社会のニーズに応える企画を実施してまいります。引き続きご支援のほど、よろしくお願い申し上げます。



新任教授紹介



大学院医学研究科 生命基礎数理学

吉井 健悟 Kengo Yoshii

略歴

関西医科大学数学教室で助手として勤務後、数理モデル構築や臨床データ解析に携わり、2013年から本学大学院医学研究科 統計学(現、生命基礎数理学)の教員を務める。2025年8月より現職。

座右の銘

急がずに、だが休まずに

数学は、現象の背後にある法則や意味について、じっくりと考えることができる学問です。理論の美しさや論理の一貫性は、数学ならではの魅力のひとつです。数式やモデルは抽象的でただの記号の羅列に見えるかもしれませんが、複雑で多様な現実世界の現象を客観的に整理し、記述する重要な役割を担っています。

当教室では、数学・統計学・情報学を基盤とした教育と研究を展開しています。医学基盤教育では、AI技術の進展に伴う医療の高度化に対応するため、数理的思考力や統計解析力を体系的に育成することを目指しています。研究面では、さまざまな分野の医学研究者や京都府と連携し、大規模医療データを対象とした数理モデルの構築とその応用に取り組んでいます。研究成果を実際の医療現場や意思決定へ還元することを目指し、社会実装を見据えた研究活動を推進しています。

医学部の学生には、数学を通じて病気と健康の違いや、その背後にある医学的メカニズムに迫ることが可能であることを学んでほしいと考えています。あわせて、数学そのものの魅力と可能性も伝えることができればと思います。今後も、教育と研究を通じて医学の発展に貢献できるよう努めてまいります。

座右の銘

錆に腐らせんより 砥で減らせ

2025年11月より消化器内科学教授に着任いたしました高木智久です。これまで、潰瘍性大腸炎やクローン病などの消化管難病である炎症性腸疾患の診療・研究を中心に、消化器内科医として活動してきました。また、京都府総括産業医や京都府丹後保健所長など、行政医師としての勤務も経験し、臨床研究支援や研究倫理規制にも関わるなど、内科医としては比較的幅広い歩みを重ねています。

これらの経験を通じて、医療は診療技術や研究成果のみによって成り立つものではなく、社会的責任や倫理性、そして人材育成を含めた総合的な営みであることを強く実感しています。100年以上の歴史と伝統を有する消化器内科学(教室)の第9代教授として、消化器疾患の病態解明と新規治療法の創出を学術的に推進するとともに、患者さん一人ひとりに寄り添った質の高い医療を実践できる診療体制の構築に努めていきたいと考えています。

また、次世代の消化器内科医・研究者の育成は、教室に課せられた極めて重要な使命の一つであると考えています。自由闊達な議論と挑戦を尊重し、教室員それぞれが強みを発揮しながら、臨床・研究・教育の三位一体で社会に貢献できる消化器内科学(教室)を目指し、全力を尽くす所存です。今後とも、皆様のご指導とご支援を賜りますよう、心よりお願い申し上げます。



大学院医学研究科 消化器内科学

高木 智久 Tomohisa Takagi

略歴

京都府立医科大学卒業後、消化器内科医として研鑽を積み、2007年より本学消化器内科学勤務。京都府丹後保健所長等の行政医師や臨床研究推進センター医師としても従事し、2025年11月より現職。

ご寄附のお願い

京都府立医科大学では、「世界トップレベルの医学を地域へ」をスローガンに、教育・研究・診療の充実を目指してご寄附を受け付けております。皆様の温かいご支援をお待ちしております。

●ふるさと納税

ふるさと納税制度を活用した寄附金で、寄附額のうち二千円を超える部分について所得税や住民税の税額控除の適用を受けることができます。

【ふるさと納税寄附金の活用事例】



人工呼吸器・汎用超音波画像診断装置の購入



救急車の購入



附属図書館にラーニングコモンズ「Koto Square」を設置

●奨学寄附金

大学の研究、教育及び診療を奨励するため、所属の研究等に対して受ける寄附金です。

●創立150周年記念事業へのご寄附

2022年に本学が創立150周年を迎えたことを記念して実施する「次世代トレーニングセンター（仮称）」の整備に対して受ける寄附金です。

●広小路キャンパス（附属図書館等）へのご寄附

学生達を応援し、図書館充実と看護学学舎整備等で学びと交流を支えるご支援をお願いします。クラウドファンディングも行っています。

●附属病院へのご寄附（病院募金）

附属病院で利用する医療機器・消耗品の購入や医療サービスの向上等、病院運営等に対して受ける寄附です。

●遺贈・相続財産によるご寄附

遺言書により相続財産をご寄附いただくもので、教育研究活動や診療体制の強化等に活用させていただきます。

●其他のご寄附

上記の寄附金以外にも、教育研究、診療環境の整備等を推進するため、広く寄附金を受け入れています。

【お問い合わせ】

〒602-8566

京都市上京区河原町通広小路上る梶井町465番地 京都府立医科大学 事務局 総務課 総務係

TEL：075-251-5210 ホームページ：<https://www.kpu-m.ac.jp/doc/about/kihukin.html>

※各寄附金の詳細は、ホームページをご確認ください。

ホームページ

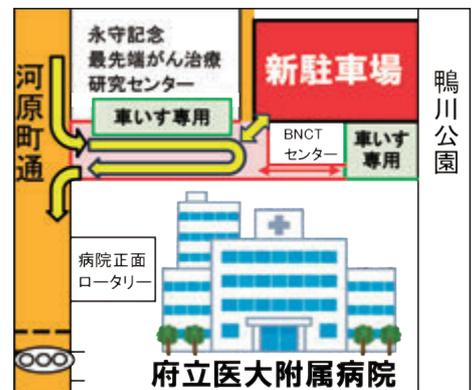


附属病院新駐車場運用開始のお知らせ

本学附属病院を利用される皆さまの利便性向上のため、敷地北側に新駐車場（河原町駐車場）を開設しました。

| | |
|------|---|
| 区画数 | 46台 |
| 開場時間 | 平日7:30～17:30 ※土日祝日及び年末年始(12/29～1/3)は入場できません。 |
| 料金体系 | 1時間30分まで600円、以降200円/30分加算 ※割引制度あり |

※料金体系および割引制度については、既存の広小路駐車場と同一です。



大学広報誌編集会議 京都府立医科大学大学院医学研究科 教授 天谷 文昌／教授 樽野 陽幸／講師 金子 美子
同大学院保健看護学研究科 教授 毛利 貴子／同大学 事務局 企画課 企画広報係 増田 百合
発行・お問い合わせ 京都府立大学法人 京都府立医科大学 事務局 企画課
〒602-8566 京都市上京区河原町通広小路上る梶井町465番地 TEL：075-251-5804 E-mail：kouhou@koto.kpu-m.ac.jp
ホームページ：<https://www.kpu-m.ac.jp/doc/newsletter/kouhoushi.html>（右の二次元コードからもアクセス可）

